

あすから淡路市で「被災地語り部シンポ」

災害の記憶を後世に伝え、今後の発生に備える「全国被災地語り部シンポジウム」の西日本（神戸新聞社後援）が、27日、淡路市の淡路夢舞台国際会議場である。阪神・淡路大震災や東日本大震災、熊本地震などの語り部が課題を共有するほか、防災を学ぶ淡路高校（同市）の生徒も参加。東北の高校生徒と発表や意見交換を促す。（内田世紀）

課題共有し記憶後世へ



淡路高生も参加 東北の生徒と発表や意見交換

2回目となる同シンポでは、識者による講演。本書を目前に控えた演者各地の語り部が集る2人は、原稿のチェックやパネル討論などを予定している。

淡路高校の生徒は26日の分科会に参加。同校の授業「防災と心のケア」を履修する2年生5人が、神戸市の舞子高校や、宮城県の気志館高校、多賀城高校の生徒と交流する。発表するのには須賀貴さん（17）と亀井恵寿さん（16）。被災者から聞き取った体験談を北淡震災記念公園の入園者らに伝える語り部活動や、防災マップ製作などの授業内容を報告す

語り部シンポジウムでの発表に向け、練習に勤む亀井恵寿さん（左）と須賀貴さん（右）淡路高校

伝えたい被災地・宮城の声

「南三陸ホテル観洋」渉外部部長 伊藤文夫さん（74）

東日本大震災の発生から3月11日で丸6年。シンポジウムでパネル討議に登壇する語り部活動の関係者を訪ね、宮城県内を巡った。今、伝えたい被災地の声とは。 （長江優咲）



はがれ落ちた屋根などが散乱したままの会館内部

かさ上げ工事で連なる盛り、地域に残る数少ない盛り土の山々の間に、4階建てのビルがぼつんとたたずむ。「南三陸ホテル観洋」に残れ。従業員は入り口を経営する阿部憲子社長（宮城県気志館市）が所有するろうとする人を引き留めま冠婚葬祭式場「高野会館」した。同ホテルの渉外部（同県南三陸町）。志津川長伊藤文夫さん（74）の解説。満ちた約200人に位置に熱がこもる。

あの日、会館3階では老人クラブが芸能発表会を開いていた。主催者あいさつ中の微機に混乱する参加者ら327人全員の命を救ったのは、従業員のとっさの判断だった。

「お年寄りの足では途中で津波に飲まれてしまう。建物から一歩も出ない方がいい」。従業員は利用客の避難誘導を開始。足の不自由な高齢者は、担ぎ上げて上を指した。

「震災遺構訪ね災害学んで」

「お年寄りの足では途中で津波に飲まれてしまう。建物から一歩も出ない方がいい」。従業員は利用客の避難誘導を開始。足の不自由な高齢者は、担ぎ上げて上を指した。

つてきた津波は、屋上にと上へ。従業員は、避難した大人の膝ほどの高 高架水櫃などがある建物



かさ上げ工事が続くまちを背に、震災遺構保存の意義を語る伊藤文夫さん（右）いすれも宮城県南三陸町志津川

最上部への誘導を急いだ。一時陸の孤島と化した屋上。波が引くまで、避難者は寒風吹きすさぶ屋上にひしめき合った。備蓄はほとんどが被災に壊され、わずかに残ったペットボトルの水を、キャップをコップ代わりに少しずつ回し飲みして翌朝の救助を待ったという。

ぼろぼろに崩れたままの壁や天井、ドアが外れてひしゃげたエレベーター、じゅうたんがはがれた階段。津波や地震の威力を物語る建物を震災遺構として恒久的に保存しよう。関係者らの構案は現在も続く。

「被災した周囲の建物はほとんどが家を消した。せめて300人以上の命が助かったこの建物だけでもずっと残り、災害について肌で勉強してしてもらえれば」。工事用のトラックが行き交う変わり果てたまちを屋上から見つめ、伊藤さんは力を込めた。



「南三陸ホテル観洋」女将 阿部憲子さん（54）

海面がぐんぐんと盛り上り、黄色い土壌が辺りを覆う。津波がまちを飲み込んだ。

2011年3月11日、宮立状態に。阿部さんは従業員を統率し、約1週間客ら面した岩盤に建つ「南三陸ホテル観洋」の女将阿部憲子さん（54）は、続々と避難客の命を守るため、客はもちろ

東日本大震災発生直後の写真を手に当時を振り返る阿部憲子さん＝南三陸ホテル観洋

「100年後も記憶受け継いで」

「千年に一度の災害は、千年に一度の学びの場」。激動の日々を振り返って今、そう思う。教訓を語り継ぐと、現在は従業員が同業して震災遺構などを案内する「語り部バス」の運行に力を注ぐ。「伝える」との意味を深く意識するようになった。私たちがあの世に行き、100年たっても記憶を受け継いでほしいから」

島通信

1月27～29日、東日本大震災で甚大な被害を受けた宮城県へ出向いた。東北のブロック紙・河北新報社（仙台市）が企画した「共催むすび館@被災地」で、全国8地域の地方紙記者らと県内の震災遺構などを視察した。

地震発生から間もなく6年。被災地は見渡す限りに赤茶色の盛り土の山が広が

被災地に寄り添う

に地震や津波の恐ろしさを伝えていた。「被災地に寄り添うとは何か」。視察後に記者らが語り合ったワークショップで、専門家が投げ掛けた。「果たして今の報道で、読者の命は救えるか」とも。記者である以前に一人の生活者として、地域の皆さんと一緒に悩み考えながら、防災・減災に取り組みたい。次の災害で、一人一人の命を守るために。（長江優咲）